

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
99-010	フィリピンにおけるイスラーム復興 —知識人の役割とその言説の分析を中心に—		
	フィリピン	ミンダナオ州立大学	
	辰巳頼子	上智大学大学院	院生修士

研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

本研究は、留学中の長期フィールドワークと文献調査をもとに、「村」レベルのイスラーム実践とその変化について民族誌を書き、現代の東南アジア世界(とくにフィリピン)におけるイスラーム信仰の変容を、社会変化との関連から明らかにすることを目的とする。

本研究はまず、イスラームを、ムスリムによって不断に参照され、解釈されるイデオロムの集合体であると定義する。そして近年東南アジアで起こっているイスラーム復興現象を、イスラームの知識をめぐる主張の「せめぎあい」と広く定義し、政治運動に分析の焦点が集中しがちなイスラーム復興のなかの「知」の分野でのイスラーム復興に焦点を当てるため、イスラームや自文化について発言するムスリム知識人に注目する。要点は以下のとおりである。

(1) フィリピン・ムスリム知識人交流史の構成

今日、フィリピンにおけるウラマー(宗教職能者)の多くが中東に留学しているか、又は中東留学経験者に学ぶことによってイスラームの知識を得る。しかし伝統的には、フィリピンのイスラーム学者たちは、他の東南アジア地域との交流を通じて、彼らの知識を深めていた。この交流は、「知」の流れのみならず、交易を通じたカネやモノの流れを伴った。本研究ではまず、調査地のむらのイスラーム知識人が、歴史的に作り上げてきたイスラームの知の交流史を、十九世紀または今世紀の前半までさかのぼり、史料とインタビューをもとに構成する。

(2) 現代フィリピン・ムスリム知識人のディスコース分析

現代のフィリピン・ムスリム知識人は、様々な場において、イスラームのイデオロムを参照し引用しながら、自文化に対して、また自文化のイスラーム実践について発言する。彼らの主張は、無から生まれた戯言ではなく、文化・社会的背景をもち、権力関係を内在させている。本研究は、ムスリム知識人による、こういったイスラームをめぐる主張を、**ディスコース**として分析の焦点に当てる。なお、ここでいうフィリピン・ムスリム知識人とは、イスラーム学を修めた宗教指導者であるウラマーのみならず、広く公・高等教育を修めたムスリムの知識人層を含み、ディスコース分析においては、新しい知の担い手としての後者の役割により注目したい。

(3) ディスコースの伝達方法の分析

イスラームの知が伝達される場所として、家庭やイスラーム学校の果たす役割は歴史的にも大きいですが、本研究ではとくに、現在のムスリム知識人たちが、小冊子やテレビ、ラジオなど新しい媒体を使って彼らのイスラームの知を伝達していることに注目し、その社会的影響を分析する。東南アジア社会を対象とした、マス・メディアによる宗教の伝達方法に着目する研究は、ほとんどなされていない。

氏名：辰巳頼子

所属：上智大学大学院 外国語学研究科

留学先国：フィリピン

留学先機関：ミンダナオ州立大学

留学期間：2001 年5 月～2003 年4 月

【研究テーマ】

フィリピンにおけるイスラーム復興

【成果報告】

①研究計画とその実際

私の研究は、フィリピン南部ミンダナオ島南ラナオ州に居住するマラナオという言語集団を対象にしたものである。当初は本奨学金を受給する2年間で、マラナオ社会のコミュニティにおけるイスラーム知識人を焦点に当てたフィールド・ワークに費やす予定であったが、フィリピンのムスリム社会をめぐる社会・政治的状況の変化から、研究方法を変更せざるをえなかった。というのも、2001 年3 月末に留学を開始したが、その後の2 年間、とくに2001 年9月11 日の米国同時多発テロ事件以降、フィリピンのムスリムをめぐる政治状況が大きく変化を遂げたからである。

人口の約5パーセントを占めるに過ぎないマイノリティであるフィリピン・ムスリムは、1960年代後半から、モロという別のナショナリティを掲げて分離独立または高度の自治を目指す運動を続けている。分離独立のための武装闘争は70年代をピークに衰退するが、現在でも分離独立への支持は衰えていない。それを支えるイデオロギーとしてイスラーム主義を支持する者も多く、分離独立とイスラーム国家の樹立をめざすMILF（モロ・イスラーム解放戦線）はその支持者を増やしている。さらに、イスラーム過激派団体アブ・サヤフは、2000年にはマレーシアのシパダン島、2001年にはフィリピンのパラワン島といったリゾート地において、非フィリピン人を含む人々への誘拐行為を繰り返している。

2001年の9.11事件（米国同時多発テロ事件）は、こういった国内問題としてのフィリピン・ムスリム問題の性質を変容させていくことになる。先述したイスラーム主義団体に対し、国際テロリスト組織との関連が取りざたされるようになるのである。実際、アロヨ政権はアブ・サヤフをアル＝カーイダと関係を持つテロリスト集団と認定し、掃討作戦の一環として比米共同軍事演習を実施することに踏み切り、2002年1月には、アブ・サヤフの本拠地バシラン島へ米軍が派遣された。MILFに対しても、「テロリスト集団」としての認定の是非が繰り返し議論されている。さらにフィリピン・アロヨ大統領が早くから米国ブッシュ政権の「テロリストに対する戦争」に対して全面支持を表明したこともあって、米＝フィリピンvs アル＝カーイダ＝フィリピン国内のイスラーム団体の対立図式は強化されていった。「テロリスト狩り」の圧力は政治団体のみならずムスリムの市民団体、教育団体にもかかり、中東の慈善団体と提携したムスリムのNGOや教育機関などの代表者が次々と逮捕された。

とされるムスリムが容疑者として報道された。容疑者は爆弾を運び、それを仕掛ける役割を任されていたとされ、現場近くで即死していた。しかし彼は彼の家族、親戚全員を連れ、マニラから帰郷する親戚を空港に出迎えに来ており、彼の家族にも爆破の犠牲者となったものがあることが公表されてから、ムスリム、非ムスリムを問わずこれに疑問の声が上がった。これは、ムスリムにとっては、ムスリムであればテロリストであるとされるという、おなじみの結末の一つであった。そしてフィリピン・ムスリムの間では、このダバオ空港でのテロ事件を、国軍によるやらせ、すなわちMILF に罪を着せてテロリスト集団のラベルをつけ、米国の対テロ支援を引き出そうとするフィリピン政府と国軍による犯行だとする見方が一般的である。

ムスリムのこの見解を政府側はむろん根拠のないものと退ける。ここでは、ムスリムの見解および政府の見解のどちらかが正しいのかは問題ではない。個別のケースでの真偽は、今の段階では判断不可能である。それよりも問題なのは、この背景としてある、フィリピン国家警察、国軍、政府に対する根深い不信である。政府との間でこのような衝突が起こるたびに、ムスリムの間では、「フィリピン政府はムスリムを抹殺しようとしている」という古くからの言い回しがより現実味を帯びて語られる。この不信感が、キリスト教化されたフィリピン国家とは異なる別の政治・経済・社会・文化的エンティティの想像をかきたてる。イスラームという別の正義、別の正統性、別の社会・経済・法システムへのファンタジーはこういった背景をもっており、近年の政治状況はまたそれをいっそう強化しているのである。テロ事件の相次ぐなか、ことあるごとに各界の異なった年齢層のムスリムに事件についての意見を聞くことによって、フィリピン・ムスリムの政治理解を幅広く知ることができた。

②-2 マニラのマラナオ・コミュニティさて、このように政府機関への強い不信感があり、また政情が不安定なとき、マラナオはどのように対応しているのか。その対応のひとつに、移動がある。マラナオは華僑のようだといわれることがある。世界中のどこにでもいるというのである。これがそれほど誇張に聞こえないほど、マラナオは故郷を離れ移動する人々である。フィリピン国内の各地、海外の多くの地でコミュニティを作り、モスクを建て、イスラーム学校を建てて生活している。そんなマラナオ・コミュニティがマニラにも多くある。

マニラに住むマラナオの多くは、官庁に勤める公務員か、バイ＝アンド＝セルと呼ばれるような日用品の小売、小規模の輸入販売などを営んでいる者が多い。興味深いことに、こうして故郷から離れた場所に位置しながらも、故郷の地で行われているよりもより「伝統的」に見えるような慣習が彼らの間で営まれている。そのひとつとしてあげられるのが、スルタン制である。マニラのあるマラナオ・コミュニティでは、コミュニティの長である男性がスルタンの称号をもっている例がある。これは1980年以降ラナオ州で始まったスルタン位の踏襲の動きに呼応しており、政治力、経済力を持ったマラナオが、自らの血筋をマラナオの王室にたどることによって、スルタン位を主張するものである。マラナオの間には、スルタンは存在したが、他のフィリピン・ムスリム集団（タウスグ、マギンダナオ）のように、領域を伴ったスルタン国は存在してこなかった。また他のムスリム集団には見られないのにもかかわらず、マラナオの間では、彼らの伝統的居住地ラナオ州内外を問わず起こっている現象である。今後、移動／移住とスルタン位の踏襲に見られるような伝統の発明については、より広範に調べる必要性を感じている。またマラナオ・コミュニティの多くにはモスクとイスラーム学校があり、イスラーム指導者がこれらの管理をしている（写真2）。これらのイスラーム指導者の中には、中東諸国などの海外でイスラームを学んだ者も多い。彼らに対してのライフ・ヒストリーの収集も行ったが、これに関

フィリピン・ムスリムの間では反フィリピン政府、反米の感情が高まり、一方で、フィリピンのキリスト教徒の間では、ムスリムをテロリストとの同一視、差別が日常的に見られるようになった。時を同じくして、首都圏やミンダナオ島ではテロ事件が頻発し、その多くにムスリムの関与が取りざたされた。2002年10月にはサンボアンガ市でショッピング・モールの爆破事件、およびマニラ首都圏ではバス爆発事件、2003年3月にはダバオ国際空港多数箇所では爆弾が爆発する事件などが起こった（年表を参照）。

わたくしの調査は、ムスリムの政治活動を直接取り扱うものではない。しかしながら、これらの政治状況によって調査の内容、範囲はかなり限定されたものにならざるを得なかった。その理由は、治安の悪化というよりも、信頼関係の構築に関する問題であった。上述したような社会・政治状況に置かれた彼らにとって、彼らの社会や信仰について学びたいというわたしは、それだけで、よそ者であるのみならず、米国が定義するところの米国対テロリストとの構図に組み、しかも米国の側にいるよそ者としてみなされてしまうのである。実際、フィリピン政府はasset（アセット）と呼ばれる工作員をムスリム社会に送っており、わたしがその一員だとみなされることもあった。

こういった事態に対して、かなりすでに財団の方からは調査計画内容の変更（主に調査の実施場所にマニラを含めることなど）について了承をいただくことができていたので、調査期間のうち多くの時間を、主にマニラに在住する各界のムスリムに多く会い、彼らへのインタビューを通じて、こういった政治状況に対する彼らの理解にふれることを試みた。またムスリムに限らず研究者にも積極的に会い、同時進行して次々と起こるテロ事件、フィリピン・ムスリムの社会問題の「国際化」について議論を重ねた。また、ミンダナオで活動する研究者、NGO関係者などとも広く交流を深めた（写真1）。

また、マラナオ宗教指導者のディスコースの調査については、マニラ現住の宗教指導者のライフ・ヒストリーの収集、ミンダナオでの調査、インタビューによって、宗教指導者の内訳、その誕生の歴史を追い、そのなかに近年の（特に中東留学経験者の）宗教指導者のディスコースを位置づけることを試みた。つぎにこれらの成果について説明する。

②-1 政治状況とその理解

フィリピン人の中には、国家に対する不信感が蔓延しているといっている。フィリピン人の4人に1人は国外へ移住したいと望んでおり、その理由には、腐敗した政治への苛立ち、国家システムへの不信がある。フィリピン・ムスリムもまた然りで、1970年代に比べて国家に対する武装闘争への参加、支持は下火になったとはいえ、フィリピン国家とは異なったシステムがムスリム社会にとっては必要である、という理解は広く共有されている。2001年9月以降の政治状況は、ムスリムにとっては、ムスリムにテロリストのラベルを貼ることで米国からの対テロリスト軍事・経済支援をできるだけ多く引き出させようとする政府と、紛争を長引かせることによって利益を得たい国軍の思惑によって決定されており、ムスリムはその被害者であるとうつる。この見方をムスリムに決定付けた出来事のひとつに、ダバオ国際空港爆破事件がある。今年の3月起こったこのテロ事件は多くの死傷者を出し、一連のテロ事件の中でももっとも規模の大きいもののひとつである。まもなくMILFの一員

してはまだ整理ができていないため、追インタビューを重ねながら今後発表していきたい。

②-3 新・旧宗教指導者とイスラーム正統主義の流入

私がお世話になったミンダナオの調査地（南ラナオ州）のあるコミュニティの宗教指導者（グロ）は、5 世代にわたってある家系によって担われてきた。グロの主な役割は、タルティブ、イグマ、サルシラと呼ばれるイスラーム法に基づいたコミュニティの憲章、歴史文書の保存、コミュニティの政治的指導者（スルタン）の補佐である。コミュニティの場合に限っては、グロがイスラームの知識を求めるためにコミュニティの外に出るということにはなかった。知識の獲得方法は、先代のグロの残したものを引き継ぐというものであった。この方法が変化したのは、1940 年代以降である。経済、政治の中心地マラウィ市にマドラサ（イスラーム学校）が建てられ、グロはそこで学び、コミュニティに必要なタルティブ、イグマ、サルシラについての知識のみならず、より形式化された方法でイスラーム学を学ぶことになった。この後マドラサがイスラーム学を学ぶ学生の中東留学の拠点となり、教師も中東留学経験者でしめられることになることから、マドラサの建設が、「中東イスラーム」の流入の契機となることになる。この知識獲得方法の変化と宗教指導者のディスコースの変容の詳細についてのデータは現在整理中であり、追調査を重ね、また南ラナオ州の他の地域のデータと比較検討しながら、イスラームの知識獲得と中東イスラームの流入について整理し、発表していきたい。

（付属資料）年表：フィリピン・ムスリムと国際情勢

- 2000. 3-9 エストラダ政権、対MILF 全面的な軍事攻撃
- 2000. 4 マニラ・ショッピングモール爆破事件
- 2000. 4 アブ・サヤフによるマレーシア沖シパダン島での誘拐事件
- 2000. 12 マニラMRT 鉄道爆破事件
- 2001. 1 アロヨ政権成立
- 2001. 5 アブ・サヤフによるパラワン島リゾートでの誘拐事件
- 2001. 9. 11 米国同時多発テロ
- 2002. 1-7 比米共同軍事演習バシランにて
- 2002. 10 サンボアンガ市における連続爆弾テロ
- 2002. 10. 18 マニラ、ケソン市におけるバス爆発事件
- 2003. 2. 11 国軍、MILF キャンプ(Bulliook complex) を攻撃
- 2003. 3. 4 ダバオ国際空港およびダバオ市近郊における爆弾テロ（20 人以上死亡、140 人以上が負傷）
- 2003. 4 比米共同軍事演習・スルー承認
- 2003. 4. 2 ダバオ・ササ港における爆弾テロ（15 人死亡、50 人負傷）
- 2003. 4. 3 「報復」攻撃(ダバオ市内のモスク3 箇所到手榴弾)
- 2003. 5. 18 北ラナオ州や北サンボアンガ州への「punitive attack」
- 2003. 5. 19 アロヨ大統領、米国訪問、米から比へテロ対策として巨額の資金提供。
- 2003. 7. 27 フィリピン国軍若手将校、国軍の腐敗(ムスリム反乱軍に対する武器の売りつけ、国軍のテロ事件への関与) を訴え、ホテルに立てこもる



写真1（困難な状況のなかで構築することができた信頼関係は、とても貴重である）



写真2（マニラのムスリム・コミュニティのひとつにあるイスラーム学校。マラナオの生徒が多く通う）